

江戸時代初期における謡本出版過程とその文化的背景に関する研究

IKAI, Takamitsu / 伊海, 孝充

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

2021-05-08

令和 3 年 5 月 8 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02426

研究課題名（和文）江戸時代初期における謡本出版過程とその文化的背景に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Publication Process of Utaibon in the Early Edo Period and Its Cultural Background

研究代表者

伊海 孝充（Ikai, Takamitsu）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30409354

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主に近世初期に刊行された謡本の制作に能役者と能を愛好する素人がどのように関与したのかを考察した。従来の研究では、謡本刊行という大事業は能役者主導で行われたという先入観があった。これに対して本研究では、「刊本謡本を作る」という行為は謡本を書写・収集するという素人の謡文化と深く接続するものであり、彼らこそ出版黎明期の謡本制作を牽引したという重要な問題提起を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

能の詞章を記した謡本は、楽譜の一種でありながら読み物のように扱われることがある特殊な本である。それゆえ、他の同時代の刊行物との類似性がありながら、切り離されて研究されてきた。本研究では近世初期の出版文化に関する研究を積極的に援用して、これらの研究と謡本研究を接続させることを実践した。この成果によって、謡本と他の刊本との共通性と謡本の独自性が明らかになり、今後より広い視野で謡本が研究される契機を作ることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study mainly examines how Noh actors and Noh amateurs were involved in the production of Utaibons published in the early modern period. In previous research, there was a preconceived notion that the major project of publishing Utaibons were led by Noh actors. In contrast, this study raises the important issue that the act of making published Utaibons is deeply connected to the Uta culture of amateurs who copy and collect Utaibons, and that they were the driving force behind the production of Utaibons in the early days of publishing.

研究分野：能楽

キーワード：謡本 書誌学

1. 研究開始当初の背景

能の詞章を部分的に謡うもの、また謡うための目的で作られた詞章を「謡」という。その謡の稽古のための「謡本」は16世紀のはじめに書写が始まり、謡の稽古人口が増えるにつれ、広く流布する。そして江戸時代になると、この謡本史に「出版」という大きな変革が起こる。

謡本が写本から版本へと転換した時代に刊行された車屋謡本と光悦謡本については表章の一連の研究(『鴻山文庫本の研究』(わんや書店、1965年)・『図説 光悦謡本』(有秀堂、1970年))と車屋謡本に関する論文があり、その特質が精密に研究されている。しかし表の車屋謡本研究は刊本の分析の前に終了している。また光悦謡本についても近年発見された新種本について言及されていない。さらに謡本史から見た分析が中心であるため、写本から版本へという技術の変化については、十分に注意が払われているとは言いがたい。さらに、近年は謡本と密接な関係がある和書刊本(例えば嵯峨本)の研究が著しく進展しているが、能楽研究ではそうした成果を積極的に活用しようとする研究が少ない。こうした他分野の研究を視野に入れることも必要である

2. 研究の目的

本研究では出版技術が能楽に与えた影響を考察することを目的とした。能・狂言の伝書・謡本(能本)は15世紀の初めに書写が始まったが、芸能の秘奥を伝える書物だけに、これらは師匠から弟子へ書承されることが基本であった。こうした書物の伝承の在り方は、出版技術の発展によって大きく変化したはずであるが、この視点から能楽資料の伝承が検証されたことはほとんどない。本研究では、能楽資料の内、謡本に注目し、写本謡本と版本謡本との性格の差異、出版というメディアが謡本に与えた影響について考察する。特に、新しいメディアを通して技芸が流布する状況に直面した時の能役者の立ち位置について、歴史史料と能楽資料の分析を基に検証するとともに、近世初期の出版文化の担い手であった富裕層が果たした役割を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は出版文化が能楽に与えた影響を、謡本の刊行の面から考察するため、謡本自体の分析を主体とした。謡本は江戸時代初期から現在まで大量に刊行されているため、特に謡本の刊行が始まった江戸時代初期観世流謡本の状況に着目した。観世流の謡本に焦点を当てる理由は、江戸期の謡本の7割ほどが観世流謡本であり、謡本史の中心を占める種類だからである。この種の謡本刊行がどのように始まったのかを考えるために、まずこれまで私が取り組んでいた玉屋謡本と他の謡本の間を捉え直し、本研究課題の指針を明らかにした。その上で出版背景が明らかにしやすい下掛り謡本の車屋謡本刊本の特質を把握することを試みた。この分析を踏まえ、江戸初期の観世流謡本を代表する光悦謡本・玉屋謡本・元和卯月本の刊行背景を探ることを中心に、出版と能役者による技芸伝承の関わりについて分析した。

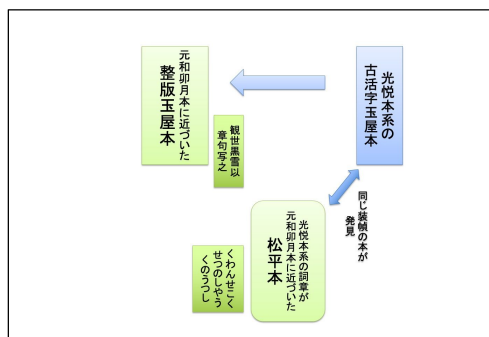
4. 研究成果

研究成果について、年度ごとに示す。

(1) 2017年度

まず研究の指針を明らかにするために、これまで研究を進めてきた玉屋謡本の特質について整理し、この本と光悦謡本・元和卯月本の間を捉え直し、近世初期観世流謡本と大夫の関係についての仮説を立てた。

従来の研究では玉屋謡本は一つの系統となるほどの独自性があると考えられていたが、古活字玉屋本は光悦謡本とほぼ同じ系統であることが私の研究で明らかになっていた。そして、図のように、古活字玉屋本をもとに「観世黒雪章句以写」という印が付くと、徐々に元和卯月本に近づいていくのである。しかも、このような現象は同じ装丁をもつ謡本にも見られ、その広がりにはまるで写本が謡愛好者の間に伝播するかのようである。このような謡本の広がりを踏まえると、光悦謡本の制作に観世大夫が関与していたかどうか疑問が生じることになる。2017年度は、こうした従来考えられていた光悦謡本の性格を特に節付表記に注目しながら実証的に再検討した。この研究成果は、「玉屋謡本の研究(四) 玉屋謡本の節付表記をめぐる試論」(『能楽研究』42号、2018年3月)として発表した。



(2) 2018年度

車屋謡本は書家で金春喜勝の弟子であつたらしい鳥養道晰とその子息新蔵が書写・刊行した謡本である。『言経卿記』などから、その形成過程がかなり具体的に辿れる謡本群であるが、この資料を研究していた表章氏が、研究を完結させる前に亡くなったため、刊本については検討されないままであつた。表氏の研究を継承しつつ、車屋謡本刊本の特質と刊行過程を調査し、最初の刊本謡本を素人がどのように制作したのかを明らかにした。

まず、刊行過程については以下のように把握した。慶長六年に後陽成天皇へ献上された車屋謡本刊本は、慶長二年ごろから刊行準備に入り、同四年ごろからその作業が本格化した。また慶長五年一月に最初の曲が完成し、同六年三月に後陽成帝へ三十番献上されたが、この時期までに五十番以上が完成（もしくは刊行準備に入っていた）と考えられ、道晰が亡くなる慶長七年までには七十番程度が完成し、現存する七十一番が刊行されたすべての曲であつた可能性が高い。

さらに、表氏が車屋謡本から除外していた古活字車屋本が、道晰の子息・新蔵などによって整版本刊行後それを補完するように制作された車屋謡本の一つである、という仮説を提示した。また、版式の特質として、古活字本の節付に注目し、光悦謡本のように一つ一つの節の活字が組み合わされたわけではなく、節の行だけが細長い一つの活字のように、文字行の間にはめ込まれていると考えた。

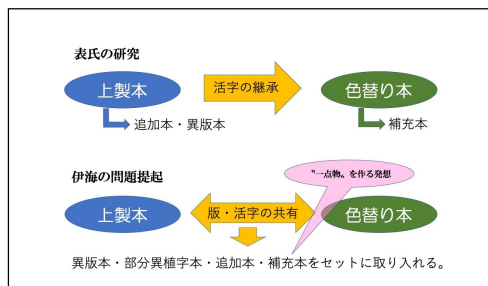
以上の版本としての車屋謡本の特質を考察すると、車屋謡本は謡の“音”を伝える楽譜としてではなく、本文をどう理解するかという点が追究された書籍としての特徴が際立つ本である、と結論づけた。この一連の研究は「車屋謡本刊本考—鳥養道晰が作った謡本」（『能楽研究』44号、2020年3月）としてまとめた。

(3) 2019 20年度

2年間の研究成果を踏まえ、光悦謡本を中心に慶長年間に刊行された観世流謡本古活字本の刊行背景をめぐる研究を行ない、年度末に本研究課題の集大成として研究会「近世初期出版文化の中の謡本 光悦謡本を例に」を開催した（コロナウィルス感染症の影響で2021年2月に開催）。本研究集会は、謡本研究と出版研究・書誌学を接続することも大きな目的とした。本研究集会で報告したのは、以下の3点である。

A 分類・組版

表氏の研究では、光悦謡本の異版本・異植字本はわずかに数本しか報告されていないが、今回の調査でそれをはるかに上回る数が存在することが明らかになった。謡本以外の嵯峨本では、意図的に活字の入れ替えを行なう「部分異植字版」が存在するが、光悦謡本の異版本・異植字本はそれとは異なり、上製本・色替り本などの複雑な関係の中で生まれた現象であると考えられる。謡本は他の嵯峨本とは異なり、複数の冊子がセットとなって形成されている。そのセットを作る中で、“一点物”を作る発想があつたと考えられ、その様々な彩りの一つとして異版本・異植字本があつたと考察した。

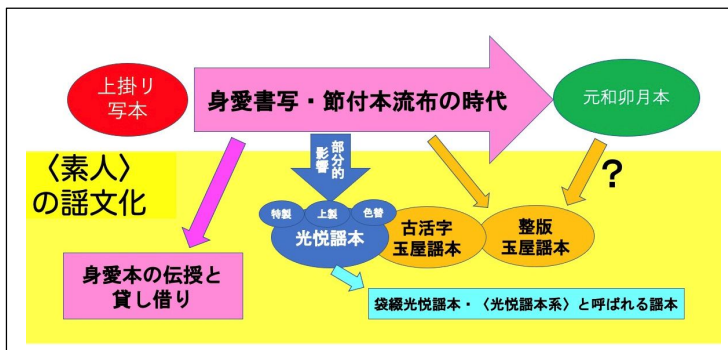


B 刊行年

表氏の研究では、上製本 特製本 色替り本の順で光悦謡本帖装本が刊行されたと考えられている。この定説に対して、特製本と上製本の節付の密接度と色替り本の節付の孤立性、書誌学で検討されている「嵯峨本前史」と特製本の活字の特殊性を結びつけ、特製本 上製本 色替り本の順で刊行された、という仮説を提示した。

C 刊行者・底本

光悦謡本は観世身愛の詞章改訂の結果が反映された本であり、彼が主導で刊行したというのが従来の定説である。これに対して、他の嵯峨本は善本が底本となっていないこと、光悦謡本の詞章（とくに節付）に身愛が関与したとは言い切れない特徴があることから、光悦謡本の底本が所持者の手沢本を編むかのように作られた、という考えを提示し、光悦謡本も素人の謡文化の中で制作されたという仮説を提示した。



なお、この研究会の成果は、当日登壇者・参加者から賜った意見を踏まえ、2021年度中に論文化する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 伊海孝充	4. 巻 44号
2. 論文標題 車屋謡本刊本考 鳥養道セツが作った謡本	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 能楽研究	6. 最初と最後の頁 1～52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊海孝充	4. 巻 42
2. 論文標題 玉屋謡本の研究（四） 玉屋謡本の節付表記をめぐる試論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 能楽研究	6. 最初と最後の頁 57-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Takamitsu Ikai
2. 発表標題 Yamabushi as Actor: The Space Between Shugendo and Noh
3. 学会等名 Association for Asian Studies（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊海孝充
2. 発表標題 Study on the Text Transformation of Noh—How the Medium of Print Affected the Texts
3. 学会等名 ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究課題の集大成として研究集会「近世初期出版文化の中の謡本 光悦謡本を例に」を開催した（コロナウイルス感染症の影響で2021年2月21日開催）。登壇者は伊海のほかに、小秋元段氏（法政大学）、竹本幹夫氏（早稲田大学名誉教授）。当日の議論を踏まえて、この成果を2021年度中に論文化する。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------